

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

直 良 信 夫 (付 平井尚志)

金 子 浩 昌

1. チチハル近傍額拉蘇発掘の自然遺物

直 良 信 夫

1. 緒 言

昭和8年7月15日、東京帝国大学文学部考古学教室駒井和愛氏は、京都帝国大学文学部考古学教室水野清一氏と共に、額拉蘇西南方に位置している、細石器文化遺跡を調査せられた。此の小報は当時多くの人類遺物と共に同遺跡に於て発掘せられた動物についての概報であって、駒井氏の依頼になるこれら動物の残骸を考査するに、それらは無脊椎動物と脊椎動物から成り、前者には貝類、後者には魚、鳥、獣の類が含まれている。今その目録を載示すれば下記の如くである。

I 無脊椎動物

貝類

イシガイ *Unio douglasiae Griffith et Pidgeon*

II 脊椎動物

魚類

コヒ *Cyprinus carpio Linnaeus*

フナ *Carassius auratus (Linnaeus)*

鯨 *Ctenopharyngodon idellus (Valenciennes)*

コヒ科の一種 *Cyprinidae gen. et sp. indet.*

ナマズ *Parasilurus asotus (Linnaeus)*

カウライギギ *Pelteobagrus fulvidraro (Richardson)*

鳥類

クマタカ *Spizaetus nipalensis orientalis Tem. et Sch.*

ホクマンキジ *Phasianus cf colchicus pallasi Rothchild*

ナベヅルの一種 *Megalornis sp.*

哺乳類

オオカミ *Canis lupus Linnaeus*

- 家犬 *C. familiaris* L.
 モウコキツネ *Vulpes cf vulpes* L.
 アムールタスキ *Nyctereutes amurensis* Matschie
 ケナガイタチ *Kolonocus putorius* (L.)
 マンシウイノシシ *Sus continentalis* Nehring
 ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin
 黄羊 *Gazella gutturosa* Pallas
 モウコノウマ? *Equus przewalskii* Poliakov ?

※計測数字の単位は凡てmmを以て示す。

2. 種の略記載

I 軟体動物

辨鰓類, カラスガイ科

インガイ *Unio dauglasiae* Griffith et Pidgeon

貝類としては本種のみである。殻は前後両端の何れかに疵をもっている。現在松花江若しくはその流域の小流及び池沼に棲息しているものと変りはない。只幾らか殻が重厚である。今参考のため比較的完全な殻を有している異同大のものについて計測してみると次のような結果となる。

	額拉蘇発掘	阿什河採集現生品
殻長	53.5	54.0
殻高	28.0	28.0
殻隔 (但し片殻に於て)	10.0	10.0
重量 (瓦)	6.6 (但し殻を失う)	5.5

II 脊椎動物

1. 魚類, 真口類, 鯉科

コヒ *Cyprinus carpio* Linnaeus

鱗片, 胸鰭有棘骨

鱗。微片となったものはフナの鱗片中に混じて2, 3注意せられたが完形を保有するものとしては殆んどない。鱗片は頸部に近い側線鱗であって小形である。内縁の鋸歯状屈曲に乏しく, 環輪線はかなり細密である。

鱗長 8.5

鱗幅 8.2

胸鰭前側有棘骨, これも破片となったものは数片存する。大きいものは骨幅が10.0に達するものも

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

あるが、小さいものでは3.0±である。凡て完形を保有していない。ために充分観察する事は出来ないが、一体に溝は深く棘はかなり強大である。

フナ *Carassius auratus* (Linnaeus)

鱗。塊状をなして発見せられたものの大部分をなしている。何れも破損して、数の多いのにも拘らず完形を保有しているものが少ない。微片を注意してみると、頸部、腹部、尾部近くのそれぞれの鱗があるが、側線鱗はあまり見られない。今胸部附近のものと推定せられる鱗についてみるに、内縁の鋸歯はやや鋭く、後辺に於ける有節放射状は中等度に発達し、内環輪線は密に、外環輪線は少しくあらめに立っているのが注意せられる。大体に於て大きさは鱗長8.5± 鱗幅10.0±位である。

鯢 *Ctenopharyngodon idellus* (Valenriennes)

咽頭歯 (Pharyngeal tooth) — 3

歯の外観は鎌身状をなしていて扁平であって、咀嚼面は *Elephantidae* 下顎臼歯咬耗度の著しく進展したのを見るように、多少舟底状に窪んでいる。櫛歯は11—13 (内側は12±, 外側13±) であって、外側よりも内側櫛歯の方がやや太く、且つ内外両側は突出している。往々にして内側は歯ずれが強い。

	No. 1	No. 2	No. 3
歯 長	13.0	13.0	13.0
歯 幅	2.5	2.9	2.5
歯 高	5.0	6.5	6.5

コヒ科の一種 *Cyprinidae* gen. et sp. indet.

顎骨片。何れも歯を失っているのであって、顎相からして *Cyprinidae* のものである事は知られても種名を決定する事が出来ない。歯別に於てコイは弱い鼎状を呈するのが普通であるが、本標本では寧ろ鈍い弓状をなしている。

ナマズ科

ナマズ *Parasilurus asotus* (Linnaeus)

左側? 上顎骨, 左側胸鰭有棘骨

上顎骨は歯を全欠失している。その痕窩のみを止めている。略7—9の歯列を有しているのであるが、前後両側端に於ては多少不規則的に集列し、各歯窩は互生的に並列している。

上顎骨現長 70.0± 上顎骨幅 16.0±

胸鰭有棘骨は関節部は頑大であって棘骨は丸味をもって太く、切断面形は類楕円形を呈し、端部を失ってはいるが相当の長さを有し、棘はあまり強大ではない。

胸鰭有棘骨長 (先端を少欠) 60.0±

カウライギギ *Pelteobagrus fulvidraco* (Richardson)

左側胸鰭有棘骨

ナマズの棘骨によく似たものではあるが、その異なる点は一体に骨体は薄目であって、特に関節部が花車なのである。然し棘はナマズよりは強大であって且つその走向を異にしている。

胸鰭有棘骨長（先端少欠） 38.0+

2. 鳥類, 鷹類, 鷹科

クマタカ *Spizaetus nipalensis orientalis* Temminck et Schlegel

右側上膊骨—1 左側大腿骨—1

上膊骨は老成したクマタカとしては普通大のものである。只下端関節部がやや幅狭い。上部関節面に於ける頸部は大きく膨出し、頭窩は卵形をなし大結節は小さい。下部関節面に於ては、内上髁は中庸の突出を示し、滑車面は球に近い形をしている。

大腿骨は多少太く、頭部は骨体の縦主軸線とは95°±に角出し、小転子は痕跡に発達し大転子はかなり突出している。下部関節部は頑丈であって、内上髁は左程ではないが、外上髁は著しく突起している。

	骨幹長	上部関節部内外径×前後径	下部関節部内外径×前後径 (H. Howard 氏の測定法によらずして完体を計測する)	体中央位最小部に於ける内外径×前
右側上膊骨	166.0	33.0(多少欠損あり)× 16.0±	24.0×15.0	10.5×13.0
左側大腿骨	114.0	25.0×19.0±	24.0×18.0	11.5×11.0

鶏類, 雉科

ホクマンキジ *Phasianus cf colchicus pallasi* Rothchild

左側上膊骨—1

骨体の上半を止めているものである。頸部は大きくしてよく膨み、頭窩は卵形をなして現生種よりは多少骨幹は太目である。

上部関節部内外径×前後径 10.0×22.0

骨体中央の最小部と認むべき部分内外径×前後径 7.0×8.0

鶴類, 鶴科

ナベヅルの一種 *Megalornis sp.*

跗蹠骨下端—1

この骨は下部蹠骨関節部から約37.0上方に於て、骨幹を人工によって切截せられているものであって、骨体は前後に扁平であって切断面部の形状はやや長卵形をなしている。大きさは現生種と大差はない。只あまりに小さい小破片であるために詳細を知り得ない。

切截部に於ける骨体内外径×前後径 11.5×6.0

下端蹠骨関節内外径×前後径 23.0×15.0

3. 哺乳類

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

食肉類, 犬科

オオカミ *Canis lupus Linnaeus*

左側下顎骨体破片—1

P₃前歯槽部位から M₁前歯槽下までが体を止めていない標本である。下顎体はオオカミとしては中庸のものであって、体厚はやや厚く多少内側への彎曲が強い。体の外側は少しく内窪みになっているが内側ではその中央が少しく膨み、下底に於ては可成窪み、下底辺は厚くして丸味もっている。凡て臼歯を失っているの歯については詳細を知り得ないが歯槽からみるに、歯列弓は強目であって、各臼歯は大きかったらしい。P₃、P₄は相接し、P₄後辺の舌側はM₁前丘の頬側と著しく重り合っている。

	下顎体厚	下顎体高	
P ₃ (後歯槽下)	11.0	25.0	
P ₃ (後)	12.0	26.0	
P ₄ (中央)	12.5	28.5	
M ₁ (前歯槽下)	13.5	28.0	
P ₃ (歯槽) — M ₁ (前歯槽)	歯槽長	34.0	
	歯槽長		歯槽幅
P ₃ (後歯槽)	7.5 (もし完形なりせば)	14.0±	6.5
P ₄	15.0		7.5
M ₁ (前歯槽)	13.0 (もし完形なりせば)	26.0±	9.5

家犬 *Canis familiaris L.*

上顎骨残片—1 下顎骨 (左右揃えるもの)—1

右側上顎骨破片—3 左側上膊骨—1

右側橈骨—1 左側橈骨—1

右側大腿骨—1 左側脛骨—1

上顎骨残片。発掘当時には頭骨は略完全なものではなかったかと思われるのであるが現在では破損して微片となっていて、接合復原してみても、原相を窺う事の出来る部分は僅かに上顎骨のみとなった。顔面骨長は略現生小形満洲犬と同大同相のものである。外前頭櫛はやや高目であって、額骨上面はかなり窪み、眼窩は相当大きかったらしい。上顎骨上辺のしゃくれ方は甚だ強く、眼窩前孔は P₃後根の上位にあって比較的小さく、犬歯外側の膨出は強くはない。前上顎骨前縁底の下出は中庸である。上顎骨底は頸の低目なプラスチック様をなし、門歯列は大破していて充分に窺ふ事は出来ないが小豆粒大のものであったように考えられる。歯列にあつては右側は i¹、P¹、P²、M¹、M²を失い左側に於ては i¹のみ脱失している。門歯列は殆んど半弧をなし、i³との隙長は 3.5、前臼歯は凡て相互の歯間に隙を有しているが後臼歯は密植している。CとP¹の隙長20、P¹とP²とは 2.5。P²とP³は1.1。P³とP⁴は0.5±である。

i² よく咬耗せられていて、咬右面は柿果状を呈し、唇面から舌側に向って少しく傾斜している。歯冠は一体に膨みが強く、歯頸線の隆起は顕著である。vordere の発達は鈍く hintere cingulumspitze は著しく発達する。

i³ 咬頭は後方に斜めに磨削せられ、全体的に歯頸部の膨みが強い。

c 左右両側とも咬頭は破損している。歯冠は歯窩の約 1/3 上位を占め、歯冠前側体下顎の犬歯による圧迫が著しい。歯冠は頬舌両側とも膨みは中庸のものであって hintere cingulumspitze の発達は鈍い。根は比較的丸みが強い。

P¹ 咬頭へ尖りは著しく鋭くはない。歯冠の膨みは頬側に於て著しく歯冠前後両側は心もち尖り気味を有するから、その相貌は桃の堅果様をなしている。歯頸線はよく隆起する。根は単根であって太い。

P² 歯冠長は幅の約 3 倍であって、前丘下に於て歯冠頬舌両側は心もち括れ、その概貌は繭状をなしている。咬頭は後方に走向して比較的低頭、後丘は痕跡的に存在する。歯頸線の隆起は強い。

P³ やや大形であって咬頭は歯冠の略中央位を占め比較的低頭であって鋭く尖らない。後丘はよく発達し歯頸線の隆起は強い。舌側面に於て原丘の後丘に接した部分に結節様の膨出部があり、P² のものよりはずっと大きい。

P⁴ 歯冠長は幅の約 2 倍に近い。舌側丘の発達は左程ではなく、前丘は咬頭を少しく舌側に屈するが如くに尖出し、後丘の発達はやや不顕著である。歯頸線はよく隆起している。

M¹ 頬側丘と舌側丘との括れは強目であって、頬側丘列に於ても前丘と後丘との括れは多少鋭い。咬合面窩は浅い V 字谷をなし、咬合面縁は一体によく隆起している。頬側に於ける前側咬合面角は角張り後側に於ては丸い。

M² 歯冠は後方に向って少しく彎曲し、各咬頭の発達は鈍い。咬合面は強く中窪をなし咬合面窩は浅く、咬合面縁の高まりは比較的顕著である。

顔面骨長 (眼後突起部より前上顎骨前縁まで)		90.0
上顎骨高		50.5
前上顎骨左右径 (但し右側 側復原)		34.0
前上顎骨底長		23.0+
孔底左右径		21.5
前頭骨高 (但し口蓋骨底面より)		57.5
上顎骨底左右径	M ¹ —64.0±	P ² —31.0±
i ¹ (歯槽) — i ³ 歯列長		12.5
P ¹ —M ³	〃	61.0
P ¹ —P ⁴	〃	46.5
M ¹ —M ³	〃	19.5

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

	齒冠長	齒冠幅	純齒冠高	齒冠高		全齒高
				頰側	舌側	
i ¹ (齒槽)	3.0	4.5	—	—	—	—
i ²	5.0	5.0	6.2	10.0 (面)	4.5	15.5
i ³	7.0	6.2	8.0	11.7	8.5	19.5
C	10.0	6.0	16.0+	—	—	32.0+
P ¹	5.0	4.0	4.5	6.0	6.0	13.0
P ²	9.0	4.1	4.8	6.0	5.5	—
P ³	11.6	4.9	5.5	6.0	7.0	—
P ⁴	19.0	10.1	9.5	10.0	10.0	—
M ¹	12.5	15.0	7.0	8.5	5.5	—
M ²	6.9	9.5	4.0	5.5	3.0	—

乳臼齒を有する右側下顎骨。永久齒の萌生なき仔幼のものであって dm²—dm⁴ を有し、Cは漸く萌生しようとしている。下顎体は仔幼であるにも拘らず比較的大きく且つ頑丈である。体は特によく膨みを有してはいないが全体としてかすかに丸みをもち、体底も亦尖っていない。

dm² Cの齒槽後縁から13.0後位にあって、その中間にP¹の齒槽がみられる。dm²は根を前後に強く張り、齒冠は薄くして、咬頭は少しく舌側に曲る。齒冠上面形は幅の狭い瓢形をなし、齒冠は膨みを有する事なく後側は心もち尖っている。

dm³ dm² から3.0離れて後植し、齒は著しく後方に傾く。齒冠は薄くして咬頭はよく尖り、その舌側屈曲は顕著である。後丘は太く齒頸の隆起は著しい。

dm⁴ dm³ より1.0の隙を有して植立し、齒冠は膨む事が鈍く、前後両側はかなり強く尖っている。齒冠は原丘下に於て頰舌両側面とも広く括れ前丘の丘側屈曲は中庸度である。原丘は多少舌側に傾いて尖り、前丘との谷はV字谷であって原丘列舌側丘は小さく、後丘列頰側丘はその発達が鈍い。咬合面窩は丸底のV字谷をなしている。

C 根部は漸くその半ばを生じている。齒冠は比較的に丸味を有し舌側前縁の稜はやや鋭く齒頸線は目立って高まっている。

	下顎体高	下顎体厚
C	21.5	12.0
dm ₂	23.0	11.5
dm ₃	24.5	10.5
dm ₄	28.0	10.5

dm₂—dm₄ 齒列長

	齒冠長	齒冠幅	純齒冠高	齒冠高		全齒高
				頰側	舌側	
dm ₂	6.0	2.4	4.0	7.5	6.0	19.5

直 良 信 夫

dm ₃	8.0	3.3	5.0	9.5	7.0	17.3
dm ₄	13.0	5.0	5.5	10.0	9.5	20.5
C	10.3	6.2	17.5	—	—	27.0

左右両揃の下顎骨 此の標本は下顎連合部前辺と右側は枝骨全部。左側は嘴状突起の少部を欠失している。下顎骨は大体30度の角度を有し、下顎部は長く、その前面は正中線に向って少しく突出して居り、上面の後辺は深いV字谷をなしている。下顎体は中庸の大的のものであって頤孔は大きく、体の外側は膨みが少なく、その上縁は歯列に沿うて特に帯状に高まる。内側も亦膨みは少なく、下底に接した体の中央は M¹ の附近に於ては少しく膨みを有するがその前後に於ては心もち縦にしゃくれている。体の下底辺は少しく厚くして丸味をもっている。体の下方膨出は樺太犬のように強くはない。枝骨は多少上偏していて比較的小さく、下底の括れは鈍い。角状突起は上方に向って曲り、しかも尖っていて顕著に突出する。髁状突起は角状突起と略同程度に後出していて、角状突起との間は深い谷をなし、髁状突起上辺の枝骨谷は浅い。枝骨上辺は多少破損しているので充分原相を窺う事は出来ないが多少尖って後屈していたものと想像せられる。枝骨三角窩は大きくして深く（深さ10.0±）その前辺はかなり鋭く尖っている。枝骨前辺はやや厚めであって下顎関節面は幅広く長さは短い。歯列は門歯列を全欠、右側はC—M₃まで完植、左側は同様完植しているがP²のみは、欠歯になっているのであるが、残根が少しく残留していて後根部にもその存在の痕跡が認められるから、脱落后自然治癒の途上にあるものと解せられる。

C 歯冠高は全歯高の約1/3を占め咬頭は鋭く尖ってはいない。後方彎曲は中庸度であって、歯冠は全体的に膨みがやや強く、舌側前縁の稜は高い。歯頸の隆起は軽微である。根は膨みを有する事鋭く頬舌両側面とも縦に浅い溝をもち根端は尖っていて閉腔・頬側にかなり強く屈出する。

P¹ Cとの歯隙は5列であって、歯冠上面形は楕円形をなしその膨みは強い。咬頭は多少前傾して高くはない。歯頸部の高まりはやや著しい。

P² P¹との隙長は1.5である。歯冠長は幅の約2倍に達し、歯冠の膨みは強い方であって、原丘下の括れは鈍く、歯頸線の高まりは強い。

P³ P²との隙長は3.0であって、歯冠はP¹の約3倍からあり幅は広い。歯冠の前後両端、特に前側は心もち尖り、原丘下の頬舌両側は少しく括れている。歯冠は頬側よりも舌側後半に於てよく膨み、咬頭は右程高くはなく、後丘も亦かすかに存している。

P⁴ P³との隙長は1.0±、歯冠はかなり幅広くなっている。咬頭はやや尖っていて少しく舌側に屈曲し、後丘は顕著に発達して歯頸線の隆起は著しい。原丘下側辺の括れは鈍く舌側に於ては原丘後辺に少しく突出部を有する。

M₁ P₄とは0.5±離れていてP⁴の舌側M¹との頬側辺とは多少重なり合っている。歯冠は太目のものであって咬頭は左程鋭くはない。前丘と原丘との舌側谷は深いV字谷をなし前丘部の舌側屈曲は極めて軽微であって原丘下に於ては舌側のみ少しく括れを有して頬側に於ては殆んど之を認め難い。原丘列と後丘列との括れは頬側に於て強く、舌側に於ては寧ろ多少膨出する。原丘列舌

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

側丘は小さく咬合面窩は幅広いV字谷を形づくり後丘列頰側丘は著しく太い。齒冠前側は丸味をもって少しく突出している。齒頸線の隆起は強い。

M₂ M₁ に接して植立していて大きく、大豆大のものである。全体的に長方形に近い卵形のものであって齒冠の右側はかなり膨みを有しているが、頰側に於ては寧ろ少しく内方にしゃくれている。vodere は比較的高く前丘は太いが咬頭に磨削部があつて原丘よりも多少低目であり、咬合面窩は浅い皿状を呈し、咬合面縁は少しく高まっている。

M₃ M₂ の約 1/3 大であつて、齒冠の膨みは著しく齒冠上面形は橢円形をなし、後側は左程ではないが前側は極めて微かに尖っている。丘は齒冠正中線より少しく頰側に偏して存在し、その尖りはやや著しい。咬合面縁の高まりは強い。

下顎骨長 (i₁ 齒槽前縁より 髁状突起まで) 135.0

〃 (〃 角状突起まで)

枝骨高 (但し上辺少欠)

	下顎体高	下顎体原
C	{左 17.5	12.0
	{右 18.0	11.3
P ₁	{左 19.5	10.5
	{右 20.0	11.0
P ₂	{左 20.5	10.0
	{右 21.0	10.0
P ₃	{左 22.0	10.0
	{右 21.5	9.1
P ₄	{左 23.5	11.0
	{右 23.5	10.2
M ₁	{左 25.0	11.5
	{右 25.5	11.0
M ₂	{左 24.5	10.0
	{右 25.0	9.5
M ₃	{左 26.5	9.7
	{右 26.5	10.0

下顎連合長 35.0±

〃 幅 (Cの位置) 22.0

関節面幅×長 26.5×5.0±

i₁—i₃ 齒槽長 左 8.5

P₁—M₄ 齒列長 {右 71.0
{左 70.5

P₁—P₄ 〃 {右 39.5
{左 38.2

M₁—M₃ 〃 {右 34.0
{左 33.5

直 良 信 夫

	歯冠長	歯冠幅	純歯冠高	歯冠高		全歯高
				頬側	舌側	
左 i ₁ (歯槽)	3.0	4.5	—	—	—	—
〃 i ₂ (〃)	3.0	5.5	—	—	—	—
〃 i ₃ (〃)	4.0	5.5	—	—	—	—
C {左	9.6	6.3	16.1	—	—	—
右	9.5	6.3	15.5	—	—	37.0
P ₁ {左	4.5	5.4	3.5	4.5	4.1	—
右	4.4	3.5	4.0	5.0	5.0	—
P ₂ 右	7.2	4.5	5.0	5.5	6.0	14.0
P ₃ {左	10.5	4.0	6.1	7.0	8.0	—
右	10.5	5.0	6.5	7.0	0.5	—
P ₄ {左	11.4	5.4	7.0	8.0	9.0	19.2
右	11.5	6.0	7.0	8.0	9.0	—
M ₁ {左	21.0	8.3	11.5	12.0	11.9	—
右	21.5	8.2	11.5	12.0	11.0	—
M ₂ {左	9.0	6.6	6.0	7.0	4.5	—
右	9.0	6.5	5.5	7.0	4.7	—
M ₃ {左	4.8	4.0	2.5	3.3	2.0	—
右	5.0	4.0	2.7	4.0	3.0	9.0

歯牙を有せざる左側下顎骨。この下顎骨は火熱にあって焼かれていて、現在では歯牙を全欠。下顎体も亦枝骨と前端及びその中央に破損部がある。下顎骨は中形であって体高は少しく低く、体の外側は僅かに膨みその上縁の歯列に接した部分是不規則的に高まりをもち、内側にあっては膨みと亦その下辺の窪みも少なく比較的平らに近い。下底面の前半は多少尖り気味であるが、P₂からP₃にかけての部分はやや強く括れていて体の後半は少しく丸味をもっている。頤孔は大きくしてP₁とP₂との中間に開孔し、枝骨三角窩は深目であって、現状に於ては5.5±の深さを有する。歯相よりみるに、歯列弓はかなり強い弓状を呈し、前臼歯列は比較的密植している。CとPとの歯槽隙は3.5を最長として、他の前臼歯槽隙は1.0±である。P₄とM₁との重なりはかなり強い。

下顎骨長 (C歯槽後縁より枝骨三角窩の略中央位と目される部分まで) 97

	下顎体高	下顎体厚
C	18.0	—
P ₁	17.5	9.5
P ₂	18.5	9.5
P ₃	19.0	8.5
P ₄	23.0	10.0
M ₁	26.0	10.5
M ₂	26.5	10.0
M ₃	26.0	9.5

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

P ₁ —M ₃ 齒槽長	74.5
P ₁ —P ₄ //	41.5
M ₁ —M ₃ //	35.0

	齒槽長	齒槽幅
C	—	5.5
P ₁	4.2	3.5
P ₂	10.5	2.5
P ₃	11.5	4.0
P ₄	13.0	5.5
M ₁	22.1	6.5
M ₂	9.0	3.5
M ₃	3.1	3.0

右側下顎小破片 M₁の齒槽を中心として僅かに残された小片であって、体はその上縁の大部を失い、只単に下顎骨は小形のやや体厚の厚めのものだった位しか窺知することはできない。M₁、M₂ 齒槽の存在よりすれば成獣のものらしくも思われるのであるが、ことによると下顎の大きさよりみて、幼若のものではなかったかとも考えられる。M_i下位に於ける体厚10.0。M₁ 齒槽長21.0。同幅 7.0。

左側上膊骨 骨頸部から上部を失っている。大きさは中形日本犬大であって体は上滑車孔上部に於て少しく細まる。尺骨頭窩は深く、内部上窩はやや深目である。外上髁は強く高まり滑車面の傾きは強く、上滑車孔は類円形をなして大きい。

上膊長 (上膊頭下の骨頸より)	139.0
上膊骨前孔位に於ける体の内外径×前後径	12.5×15.0
下部関節部 内外径×前後径	31.5×25.0

橈骨 完形を保有している左側の一例は、中形日本犬のものよりも大きい、下端を少しく欠失している右側の一例にあっては完全であって、中形日本犬のものよりは僅かに細い。丁度三頭分存するわけであるがそのどれもが大ではない。今完全なものについてみるのに橈骨小頭はやや大きくして橈骨茎状突起は少しく太く、突起する度は強い。

	橈骨長	橈骨小頭最大径×最短径	体の略中央位に於ける最大径×最小径	下端最大径×最小径
右 (下端小破損)	134.0	18.0×11.0	12.5×7.5	—×—
左 (完)	167.0	20.5×13.0	13.0×8.2	27.0×16.5
	(但し小頭下よりepiphysis迄)	(但し小頭下に於て)		(但しepiphysisに於て)
// (上下端小破損)	155.5	20.0×13.0	15.5×9.2	28.0×21.0

大腿骨 下端を失っている。中形日本犬のものであって大腿骨頭部はやや大きく頸部は長目であ

る。大転子はやや小さくして頭部に傾き、小転子はかなり棘状をなして突起する。転子窩は少しく狭く、体に於ける粗造線は明瞭である。体の前面は丸味が強い。

大腿骨長（転子上辺まで）	148.0
大腿骨頸部 前後径×内外径	19.2×16.5
骨幹中央位に於ける 内外径×前後径	13.0×12.0
上端 内外径×前後径（大転子基部）	36.5×18.0

脛骨 略中形日本犬大である。上端に於ける内外両側の展出は強く、脛骨棘はやや顕著に突出、脛骨給節は太い。脛骨櫛は高く、体の中央は丸味の強い三角形様の切断面を有し、下端の内側は強く突出する。

脛骨長	172.0
脛骨上端 内外径×前後径	32.0×36.0
脛骨下端 内外径×前後径	21.5×15.5

特徴 以上の記述を通じて額拉蘇発掘家犬遺骸の特徴をみるのに普通の満洲犬に比して顔面骨はやや短かく従って歯牙も亦小さい。下顎骨はその長さに至っては中等大の犬であるが、枝骨は少しく上偏して前方に屈し、その前縁は内方にしゃくれる事なく寧ろ心もち前方に少しく膨みをもって張り出し気味を有する。下顎骨体底は著しく膨出してはいないが、後臼歯位から枝骨底にかけての膨出はやや強めである。歯牙は一体に大きい方であって、 M_1 の如きは家犬としては、その最大歯冠長に近く幅も亦厚目である。四肢骨は略中形日本犬大のものが主であるが、更にそれよりは大きいもの、著しく小形のもの等が散見せられる。以上の遺骸はすべて同一品種に属し少なくとも10頭分のもので解されるが、骨による性別の鑑定は困難である。

考察 額拉蘇発掘家犬の上顎骨は私の蒐集標本である満洲犬のそれよりは少しく小形であるが大體その特色はよく似ているのであって、之が満洲犬、もしくはそれに近い品種の犬であった事は否定出来ない。これを朝鮮犬に比すると M^1 の膨みが強い事に於てまづ朝鮮犬とは別品種である事がしられる。更に又蒙古犬とはその大きさに於て著しい差があり熱河省紅山後発掘家犬の M^2 に比すると、歯冠舌側縁の丸みに於て額拉蘇家犬の M^2 は強い。而して羊頭窪貝塚家犬の上顎骨底よりは少しく広くなっているが P^4 の歯相は非常によく似ている。けれども、日本犬、樺太犬等とはその類似の程度は薄い。下顎骨に於ては、その特色の一つである後臼歯下底の体の膨み及び枝骨の少しく上偏して前屈している。これらは、北亜細亜系家犬の有する特色であるが、これを樺太犬に比すると、その度は弱くなっているが、枝骨前屈の度は樺太犬よりも若干強めである。この特色は日本犬、朝鮮犬等とは近似する所少なく寧ろ紅山後発掘の第一号下顎骨に類縁があるのであるが、枝骨の前屈度は紅山後発掘体の方が鈍い。然るに此の第1号標本の歯牙はやや小形であって額拉蘇家犬のものとは異り、此の点は寧ろ同じ紅山後発掘体中の第2号標本のものにその大きさ及び歯相は似ているのである。これらの点からみるのに、額拉蘇家犬の下顎骨は、骨相に於ては北亜細亜系に属するが、歯牙相に於ては、多少洋犬系統のものではなかったかと考えられるのであるが、咬頭、

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

特に厚丘列舌側丘の発達著しく鈍い所は羊頭窪家犬群中の特色と一致するのであって、之等の点はある一面に於て又朝鮮犬、日本犬等に近似し、樺太犬とは相違している所以の諸点を総合してみるのに、額拉蘇家犬は、北亜細亜家犬の骨学的特色と、日鮮満先史時代家犬の歯相を併有している所に特色が有するのであって、これらの諸点から大観するに、額拉蘇家犬は極東先史時代家犬群の一品種として、北亜細亜大陸と日本、朝鮮、満洲を連繋する線の結び目のような位置にありはしなかったかという事がいえるのであって、この事情はその半面に於て当時既に相当度各家犬の交雑が各所に於て営まれていたであろう事を想像するのに役立つのである。しかしながら極東先史時代家犬の系統及びその分類学的研究の今尚完行せられざる今日に於ては、より細密に詳述する事は出来ないのであるが、当時文化の移動と併行して、之等の家犬が、亜細亜の広範囲を舞台として、南に北に或は又東西に伴行せられ、そこで色々な品種の犬と雑多な繁殖生活を営んでいたであろう事は、今日家犬の繁殖生活を目撃するまでもなく、必然的にもたらされた結果であったであろうし、私も亦、新資料を査定する度にその感を益々深くしているのである。

モウコギツネ *Vulpes cf vulpes (Linneus)*

左側上顎犬歯—1

歯高は高くして、歯全体が一体に丸みが強い。歯冠は歯高の約2/5を占め、歯冠の頬舌両側面はよく膨み、前側は下顎犬歯によって強く圧迫磨削せられ後側歯基にもP₁による磨滅痕がある。歯冠基部は少しく高まっている。根部は甚だ丸く、根端は多少頬側に曲出する。

歯冠長	9.5	歯冠幅	6.2
純歯冠高	18.3	根長	9.0
根幅	6.3	全歯高	40.0

特徴及び考察。この犬歯は全体的に膨みが強く、且つ歯冠幅が広い。この特色は私としては未見の事実なのであって、これに近い例は、種を異にしているが、曾って東京市板橋区小豆沢貝塚発掘の *V. japonicus* のものに似たのがある。狐の犬歯が異常に丸みをもつという事の原因についての研究はまだ行われていない。

アムールタヌキ *Nyctereutes amurensis Matschie*

右側下顎骨破片—1

標本は下顎連合部と枝骨上半を失っている。残余の部分からみるのに、下顎は比較的大形のものであったのがしられる。下顎体外側は多少膨み気味をもち、内側にあつては、体後辺の膨出部が著しく窪み且つ体底縁が内方に向つて曲出している。下顎体底は一体に厚くP₃からM₂にかけての底辺の下方膨出も強い方である。枝骨三角窩は少しく鋭三角様を呈して深く(深さ4.3)下顎体後辺の膨出部は甚しく後方に屈出し枝骨三角窩下縁とこの膨出部との広さは14.0程あつて日本産タヌキからみると約2倍に近い広さをもっている。歯列に於ては僅かにP₃を有しているのみであつて他を欠失し、歯列弓は歯槽の配列からみるのに中等度のものであつた事がしられる。Cの歯槽とP₁との隙長は1.5、P₁、P₂歯槽隙長は1.0、P₂、P₃及びP₃、P₄は0.5±、P₄、M₁は1.5±である。

又後臼歯列にあっては、 M_1 、 M_2 齒槽体隙は 2.6、 M_2 、 M_3 は密植している。即ちこの標本は M_2 、 M_3 を除けば前後臼歯列にあっては、臼歯は少しづつ離れて植立していた事がしられるのであって、それらの中にあっても、 P_4 後方と M_1 前丘頰側辺が重なり合わないのは異例である。齒槽及び残植している P_3 より見るのに、前臼歯は一体に大形であるが後臼歯は左程大きくはない。 P_3 多少前傾して大きく、咬頭は少しく前位に丘立し、磨削の進展が強くして鈍頭をなし、齒冠中央に於ける基部の括れは弱く、従ってその上面観は米粒状をなしている。後丘は痕跡的にしか存在していない。齒冠の前後両側は多少尖っていて、齒冠後方特にその舌側面に膨みを有するが鈍い。

下顎骨現長 (C 齒槽後縁より体後辺膨出部後端まで) 66.0

	下顎体高	下顎体厚			
C	—	5.0+			
P_1	12.0	5.5+			
P_2	12.0	6.5			
P_3	11.6	6.0			
P_4	13.0	6.5			
M_1	14.0	7.0			
M_2	17.0	6.1			
M_3	19.5	6.0			
P_1 — M_3 齒槽長		45.0			
P_1 — P_4 //		23.5			
M_1 — M_3 //		22.0			
	齒冠長	齒冠幅	純齒冠高	齒冠高	
				頰側	舌側
C (齒槽)	—	3.0	—	—	—
P_1 (//)	3.5	2.5	—	—	—
P_2 (//)	5.5	2.5	—	—	—
P_3	6.5	2.6	3.0	4.5	4.5
P_4 (齒槽)	7.0	3.0	—	—	—
M_1 (//)	11.5	3.5	—	—	—
M_2 (//)	6.5	3.0	—	—	—
M_3 (//)	2.0	2.0	—	—	—

特徴及び考察。このタヌキの下顎骨は大形ではあるが羊頭窪貝塚の *N. cf. procyonoides* のものよりは小形である。日本産の現生種よりはずっと大形ではあるが、貝塚産の老成せるものとは略近くなっているが臼歯は多少額拉蘇産のものの方が大きい。

イタチ科

ケナガイタチ *Kolonocus putorius* (Linnaeus)

右側下顎骨—1

下顎骨は日本産イタチのものものと略同大であるが、臼歯はそれよりもずっと大きい。下顎体は重厚なものであって、体の外側はよく膨出し、内側はその中央が幅広くやや顕著に窪む。下底線の下出は甚だ強く、下顎連合部は長くしてその前辺は狭く、正中線は可成高まり上面の谷は多少深く正中線はその線に沿って顕著に高まっている。枝骨は日本産イタチなどよりは更に大きく後方に発達し、枝骨底の括れは強く三角窩は大きくして深い(深さ2.3±)。角状突起はイタチとしては少しく顕著に後出し髁状突起は枝骨高の約3/4の位置を占め、関節面は広い。枝骨谷は浅いが枝骨頭部の後縁、即ち枝骨谷から嘴状突起頂に至る縁が少しく弓状を呈して張り出し、嘴状突起はやや尖って後方に傾く。歯列は門歯を全欠、臼歯列にあってはM₂を失っている。日本産イタチの如く、前臼歯列は隙を有せず、凡て歯牙は著しく密植している。門歯列は歯槽からみるのに歯は鼎状に植立しi₃は相当に大きくi₁の約2倍からの歯槽を有している。

C 強大なものであって歯冠は非常に高くして後方彎曲は強く、歯冠舌側面はi³の後側によって強く圧迫磨滅せられ、今その大半を失っている。歯冠の頬側はやや膨みが強く面には縦に畝様の襞が微細に走っている。hintere cingulumspitze は左程高くはなく、歯頸線下の根部は少しく括れている。根部は歯冠と略同高のものであって、一体に根は丸味が強く頬側面の膨みの強いのに比し、舌面は少しく内窪みになっている。根端は完全に塞腔している。

P₂ Cの後側に接して植立し、左右配列は倒「ハ」字状を呈し、歯冠上面形は類米粒状を呈しているが前側はやや尖り、頬側に於てはその前方が殊に膨出しているが舌側に於てはその後方が特に強く膨出している。原丘は著しく前方に偏在突出し、歯頸の膨出は比較的強い。

P₃ 歯冠前側はP₂の頬側後半に接し、歯の配列は下顎体の主軸に沿って植立している。咬頭はやや高くして前偏し少しく舌側に曲る。歯冠は不整達磨様を呈し頬側に於てはその中央に括れを有し舌側に於ては此の括れは歯冠の前辺、原丘下の部分に痕跡的にあって、後丘の位置に於て甚しく膨らむ。但し後丘の発達は殆んどみられない。歯頸線の隆起は強い。

P₄ 大体P₂と同様の歯相を有しているが、歯は少しく後傾して植立し歯冠はその前辺に於て浅く広めに括れ後半は頬舌両側とも略同様に膨大となり、歯冠前側は丸味が強いが後側に於ては少しく尖る。hintere cingulumspitze の発達は強く、咬頭は少しく磨滅している。

M₁ 大形であって歯冠の上面形は豆科植物の莢様概貌を呈し前丘部の舌側屈曲は鈍い。歯冠前側はP₄後辺の舌側とかなり重なり合っている。咬頭の磨滅はやや強く前丘は略P₄の咬頭と高さを等しくし、前原両丘の谷は口の広いV字状をなし、歯冠は原丘の頬舌両側に於て特に局部的に膨出し、主丘列舌側丘は退化して存せず、後丘列頬側丘(hypoconid)は歯冠上面の正中線上にある。歯頸線の隆起は強い。

M₂ 歯を脱失していて歯槽のみを止めている。M₁の後辺舌側に偏して存し多少面鋸状をなし前辺は丸く、後側は尖っている。

直 良 信 夫

下顎骨長 (i ₁ 歯槽前縁より髁状突起まで)	37.0
枝骨高	19.0
下顎連合長	12.0
関節面幅×長	8.5×2.3

	下顎体高	下顎体厚				
C	4.9	4.1				
P ₂	6.2	5.0				
P ₃	7.5	4.9				
P ₄	7.5	4.5				
M ₁	7.5	4.6				
M ₂	8.0	4.2				
門歯槽長 (i ₁ —i ₃)		2.0				
P ₂ —M ₂ (歯槽) 歯列長		19.0				
P ₂ —P ₄ "		10.0				
M ₁ —M ₂ (歯槽)"		9.6				
	歯冠長	歯冠幅	純歯冠高	歯冠高		全歯高
				頬側	舌側	
i ₁ (歯槽)	0.5±	1.0±	—	—	—	—
i ₂ (")	0.5±	1.0±	—	—	—	—
i ₃ (")	1.2±	1.0±	—	—	—	—
C	4.0	3.0	7.5	7.6	6.0	15.0
P ₂	3.0	1.5	1.5	2.0	1.5	—
P ₃	3.5	2.0	3.0	3.1	3.0	—
P ₄	4.7	2.3	3.0	3.5	3.0	—
M ₁	8.4	3.2	4.0	4.0	4.0	—
M ₂ (歯槽)	1.8	1.1	—	—	—	—

特徴及び考察。下顎体は頑丈で大きく、体下底辺の膨出は強く、且つ枝骨底の括れが強い。歯牙にあっては各歯牙は接近して大きく、殊に M₁ の後丘列頬側丘が真中になる。この標本を満洲産現生種に比してみるのに多少全体として大形である事がしられる。その他にあっては殊に著しい相違点を認め難い。日本産のイタチに比してみるのに下顎体が頑丈で厚く歯牙が大きく且つ M₁ の hypoconid が正中線に位置している点に於て異なる。即ち邦産種ではやや頬側に偏在しているのである。

偶蹄類, 猪科

マンシウイノシシ *Sus continentalis* Nehring

同一箇体に属する左右両側上顎臼歯 (P^3-M^3 植立)

左右両側上顎犬歯—2, 左側上顎臼歯 (P_3-M_2 植立), 左側下顎骨残片 (M_3 残植)

左右両側上顎臼歯。歯相, 大きさ及び磨削度, 化石化進展度その色調等によって同一箇体のものと目されるものであって, 単に歯列のみ残されているものである。左右両側とも P_3-M_3 を残植していて, 磨削は右側の方が僅かに進展している。歯列は整っていて各臼歯は密植している。

P^3 歯冠面形は繭状をなして太く歯冠は少しく舌側に属する。歯冠の前後は前後の歯壁によって強く圧迫せられ, 磨削は又かなり著しく進展している。

P^4 歯冠長よりも幅の方が遙かに広く, 後葉は前葉の約 1/2 程であって葉境はやや括れ, 歯冠は全体的に丸味が強く, 咬合面に於ては舌側から頬側に向ってミット様を呈している。

M^1 歯冠の前側は P^4 の後壁によって強く圧迫せられ P^4 の後壁は M^1 前葉前側に著しくくい違って居り, 後側は又 M^2 の前壁によってこれ又強く圧迫せられている。殆んど歯冠琺瑯質部を失う程に磨削せられていて, 内部褶襞としては, 僅かに葉境面に少しく見られるのみである。歯冠は一体に幅広くして丸味が強く特に後葉舌側面の膨出は顕著である。

M^2 大形であって歯冠の膨れは強く, 前後両葉は略同大であるが, 後葉に於てはその舌側壁はやや強く舌側に膨出するのに比し頬側面はこれと反対に内縮みに納まっている。内部褶襞は両葉面に僅かに粒状をなして点在しているが葉境は明瞭に残され, 頬側境に於ては両葉壁面からかなり太い結節が発達している。

M^3 前中両咬合面は臼状に深く窪み, 全体としては磨削は略平らに近く進んでいる。前葉は幅広く歯冠は舌側に於てはその変化は左程ではないが頬側に於てはかなり丸みをもって出入し, 且つ略粒の揃った結節が歯冠縁に並んで発達する。後葉後側は極端に納まらずして小さい乍らも丸さを有している。

左側上顎臼歯。 P^3-M^3 を植立しているものであって磨削の進展は左程ではなく, 前記のものからみると遙かに劣る。臼歯列は少しく弓状を呈している。

P^3 歯冠前後壁の圧迫は弱く両葉の括れは著しい。咬頭は丘状をなしよく尖る。

P^4 前述のものよりも大きく且つ全体が丸味が強い。歯冠長と幅とは左程大きな開きを有せず, 咬頭は乳頭状結節の発達が強い。

M^1 幅の広い繭状を呈し葉境の括れは強い。前側襞は突出する事なく, 反対に後側襞はかなり顕著に後方に膨出する。各咬頭は鋭くして太く頬側境には単基, 舌側境には複合性の小結節が発達している。歯冠は著しく膨みが強い。

M^2 非常に丸味が強くして, 歯冠幅は長さより僅かに短かい位のものである。歯冠は一体にその頬側面がよく膨出し, 後葉は前葉より心もち大きく, 葉境はよく括れ, 歯冠前後壁の圧迫は少ない。従って前後両側は孤に近い縁線をもって膨出している。乳頭状結節の発達は顕著であって, 頬側葉境底に於ける結節はかなり太くなっている。

上顎犬歯。大形であって, 前面は多少尖り気味であるが後側は直截的になり, 上面は幅広くその

中央には浅い縦溝が走っている。下面の珽瑯面は幅広くして17.0±の露出面を有し、太くしてあら
い畝に富んでいる。

左側下顎骨残片。下顎体は僅かに M³ 近くの部分のみ知り得るものであって、体高は多少高め
あって体原は中庸。体の外側は心もち内窪みをなしているが内側に於ては M³ 歯が可成膨出し、枝
骨前辺は著しくしゃくれている。M³ 前葉下に於ては体高50.0、体原31.0、同中葉下に於ては体高
56.0、体原27.0である。

M³ 前中両葉咬頭のみを僅かに歯槽からのぞかせている萌出度の鈍い歯であるが、今之を体の内側
を破って摘出調査するに、根の発達は漸くその緒についてのみであるが、歯冠は既に整っているの
が知られる。日本産化石猪ニッポンイノシシ *S. nipponicus* とほぼ同大のものであるが、それより
は少しく歯冠幅が広く且つ長目であるが、全体的に丸さをもっている。各葉境の括れは強く殊に後
側は尖る事なく丸く後展し結節は上顎 M³ 同様、粒の揃った結節の並列から成っている。各葉境に
於ては頬側のみに結節を有し舌側に於ては文を認めない。

		同一個体と推定					
		右 側	左 側	左 側			
					(P ₃ -M ₂)		
P ³ -M ³	歯列長	102.5	103.5	73.0			
P ³ -P ⁴	〃	27.5	27.0	29.0			
M ¹ -M ²	〃	76.5	76.5	44.5			
		歯 冠 長	歯 冠 幅	純歯冠高	全 歯 高	珽瑯質厚	
P ³	{右	14.5	11.5	4.5	—	—	
	{左	14.5	11.5	4.0	—	—	
P ⁴	{右	13.0	16.5	3.0	—	—	
	{左	13.0	16.0	4.5	—	—	
M ¹	{右	18.0	16.5	4.0	17.0	—	
	{左	17.8	17.2	4.0	—	—	
M ²	{右	25.0	22.0	5.5	25.0	—	
	{左	24.5	22.0	6.0	26.0	—	
M ³	{右	36.5	22.5	3.5	29.0	1.5	
	{左	36.3	23.0	5.5	—	1.5	
		齒冠高 (顎骨縁より)					
				頬 側	舌 側		
P ³	15.7	12.0	10.5	11.5	6.5	—	
P ⁴	14.1	16.5	11.0	12.0	9.5	—	
M ¹	20.0	16.6	8.5	11.5	11.5	—	
M ²	26.0	22.0	13.5	15.5	14.5	—	
C	{右	28.5	21.5	79.0+	—	0.4±	
	{左	29.0	22.5	83.0	—	0.4±	
M ³	44.5	18.5	18.2	—	—	—	

特徴及び考察。この標本はまづ歯牙が一体に大形である事が特色の一つであって、臼歯に於ける乳頭状結節はよく整っている。本種は現在満洲国からアムールランド一带に分布している猪であって、本邦産 *S. leucomystax* よりは遙かに大形の猪なのである。歯牙に於ては日本猪(化石種)と同一系統に属し同時に又わが国の貝塚に於けるミコトイノシシ *S. mikotonis* も近縁種であって、共に北シナの最新世に出現せる *S. lydekkeri* の後裔と目すべき種である。日本猪種族のものに比すると、犬歯に於ては瑛瑠質面が幅広く、臼歯に於てはその歯冠幅が広い。然し周口店産の *S. lydekkeri* の臼歯に比すると全体的にずっと小さい。

牛 科

ウシ *Bos taurus domesticus Gmelin*

主腕前骨下端—1 第2指骨—1

主腕前骨は下部関節面を止めている小部分であって、此の関節面から約85.0±上方に於て人為によって輪切にされている。関節面滑車はかなり頑丈に発達している。

体切截部に於ける内外径×前後径 45.5×28.1

関節部 内外径×前後径 83.0×45.0

第2指骨は後辺に破損部が存するけれどもかなり頑丈なものであって、現状からすれば外側のものと思われる。

上部関節面 内外径×前後径 36.0×42.0

体中央に於ける 内外径×前後径 30.0×30.0

第2指骨長 51.0+

黄羊 *Gazella gutturosa Pallas*

左側下顎骨破片—1 第3指骨—2

左側下顎骨。P₃—M₃を残植している小破片である。残存部からみるのには下顎体は低目であってやや体厚は厚く、体の外側中央部は心もち内窪みになっているが内側に於てはその上辺が少しく膨み、下底に接した部分は僅かにしゃくれている。体底はかなり厚くして強く尖らない。歯は密植していて歯列弓は中等度であり各臼歯の咬耗度は少しく進展している。各臼歯の瑛瑠質は薄い。

P₂ 歯槽のみを止めている。

P₃ 多少後傾していて歯冠は高く、歯冠長に比してその幅は約1/2程である。前側は強く舌側に屈曲し、葉境はやや強く括れ、舌側面に於ける湾入は深くして顕著である。歯頸線は少しく高まる。

P₄ P₃と同相の歯であるが少しく前傾して植立して居り葉境の括れは強く歯冠はその長さに比して幅が著しく狭い。

M₁ P₄よりは更に強く前傾し、多少その前葉を頰側に密出し斜植の傾向を有する。舌側に於ては前葉前側柱、後葉後側柱の柱状発達は強いが支柱はやや鈍く且つ又前葉後側柱及び後葉前側柱は痕跡的に存する。頰側に於ては各葉とも丸みが強い。咬合面は舌側から頰側に傾いて少しく臼状に咬耗せられ内部褶襞は少しく冠状を呈している。

M₂ M₁同様の歯相を有しM₁に比し歯は少しく大きい。舌側咬合面縁の突出は強く、舌側に於ては各柱体はM₁より更に強く発達する。然し各顎側縁は丸味の強い三角形をなし葉境底には痕跡的に結節の存在を認める。

M₃ 歯冠長は歯冠幅の約3倍に達し各葉境の括れは強く、後方に尖るにつれて各葉片は小さくなる。咬合面に於ては舌側縁の突出は強くM₂と異り各柱体は寧ろ退化している。頰側に於ては前中両葉はやや鋭三角様を呈しているが後葉は半月様をなし、前葉頰側外辺と後葉側に於ける鬚は柱状をなしている。頰側に於ける各葉境底には極めて痕跡的に結節が存する。

	下顎体高	下顎体厚				
P ₂	—	7.0				
P ₃	—	7.5				
P ₄	20.0	9.1				
M ₁	21.6	11.0				
M ₂	23.5	12.0				
M ₃	—	13.5				
P ₂ (歯槽) — M ₃ 歯列長						74.0
P ₂ (//) — P ₄ //						26.0
M ₁ — M ₃ //						49.0
	歯冠長	歯冠幅	純歯冠高	歯冠高	全歯高	
				頰側	舌側	
P ₂ (歯槽)	5.5	2.2	—	—	—	—
P ₃	9.1	5.0	—	8.0	7.5	—
P ₄	11.0	5.2	—	10.0	9.5	—
M ₁	13.5	8.0	—	9.0	10.5	—
M ₂	15.5	8.4	19.0	10.0	11.5	27.0+
M ₃	21.5	8.7	19.5	10.0	11.0	31.0
瑠璃質厚						0.6±

第3指骨は左右両側とも各1箇づつであって、凡て焼骨となっているものであるが原相をよく止めている。鹿に比して長さよりも幅が広く、背面に丸みが強く、掌孔は太い。

第3指骨長(前後径) × 幅(内外径) × 高 $\left\{ \begin{array}{l} \text{右} \quad 36.1 \times 21.0 \times 17.5 \\ \text{左} \quad 36.5 \times 20.0 \times 18.3 \end{array} \right.$

特徴及び考察。下顎骨は一体に体高が低く臼歯にあっては幅がやや狭く、舌側に於ける歯冠の各柱体の発達は弱い。黄羊は北満一帯には今猶多数群棲している種類であって、下顎骨は羊 Ovis によく似ているが、前述の特色によって Ovis と区別せられる。

奇蹄類, 馬科

モウコノウマ? *Equus przewalskii* Poliakov ?

第2指骨—1

小形であって冠骨突起は高くなく、上靱帯突起は太く靱帯窩はやや深い。対種子骨関節面は蒲鉾形をなして広く、上部関節面窩は臼状をなして深く下部関節面は広目である。

第2指骨長 41.0

第2指骨上部関節部 内外径×前後径 42.0×27.0

体中央 内外径×前後径 35.0×19.0

第2指骨下部関節 内外径×前後径 35.5×23.5

特徴及び考察。この第2指骨はモウコノウマとしては甚だ小形であって、それが又本標本の特色かとも思われるのであるが、しかし夫にしてもあまりに小形であって、仔幼のものでない限り *Equus* のものとしての確信は出来ないのであるが、単に指骨のみでは、之以上深く考究する事も出来ないもので、今仮りに?を附して本種としておいた。大きさからいへば、寧ろロバ *Asinns* のものに近い。しかし之をモウコノウマの小形のものに比較してみると、その骨相はよく似て居り、且つ之をモウコノウマの第1指骨を嵌当してみるに比較的無難にあてがう事が出来る。

3. 結 語

以上記述の如く額拉蘇近傍の細石器文化遺跡に於て、水野・駒井両氏の採掘せられた生物残骸は、貝類1種、魚類7種(内一種調査未完成)鳥類3種、獸類9種に及び全体としては20種に上る。しかし実際としてはもっと多種類に亘るかもしれないのであるが、微細な骨片に至っては、到底種別同定の資料としては取扱い得ない場合が多いので、現状を以てしてはこれ以上查考する事は出来なかったのである。貝類は淡水産であって私の見た凡ての殻の前後両端の何れかには破損部があった。之はこれらの貝類が食用とされたものである事を示しているのである。この種の貝は比較的水足の鈍い泥底の小川や池沼に棲息しているものであって、水が澄んでいる場合には貝の活動をよく透視する事が出来、こういう場合此の貝はよく捕獲せられるのであるが、肉は左程美味ではない。魚類は鯉科のものが割合に多く、就中フナの如きは魚鱗のみが骨を交えず塊状をなして発掘せられているのをみると、日本内地の貝塚に於ける例と同様、調理に際してまづ鱗片をはぎとった事を示していると考えられよう。鳥類は大形のものが多く小禽類はみられなかった。中でも鷹科のもの等はその一異彩といえよう。獸類は野獸と畜獸とから成り、後者は全体の33%に相当する。食肉類5種・偶蹄類3種・奇蹄類1種であって残された骨としては家犬のものが一番量的に多い。猛獸としてはオオカミを有している。マンシウイノシシも亦ある意味に於て当時の人類には強敵であったかもしれない。家畜としての犬は骨面に刃物の痕跡や焼けた部分をもっている事からして、ある場合には食用にされた事と思う。中形日本犬大の犬であって遺骨からみれば私共が満洲犬と呼んでいる品種に近いものである事がわかる。馬は非常に小形であったが、これは野馬ではなく牛と共に家畜であ

満蒙先史時代遺跡発掘獣類

動物	物種	ハイラル附近 (A. S. Louka- shkin)	ハイラル南方 ドロット(水 野・駒井両氏 採掘)	チハハル近傍 オロス (同前)	赤峰紅山後墓 地(東亜考古 学会採掘)	同第一住地 (同前)	同第二住地 (同前)	羊頭窪貝塚 (三宅・金関 両氏採掘)
タラバガン	<i>Marmota bobac sibiricus</i>	+	-	-	-	-	-	-
オオカミ	<i>Canis lupus</i>	-	-	+	-	-	-	-
○家犬	<i>C. familiaris</i>	-	+	+	+	-	-	+
シナタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	-	-	-	-	-	-	+
アムールタヌキ	<i>N. amurensis</i>	-	-	+	-	-	-	-
モウロギツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	-	+	+	-	-	-	-
モウロアナグマ	<i>Meles leptorynchus</i>	-	+	-	-	-	-	-
ケナガイタチ	<i>Kolonocus putorius</i>	-	-	+	-	-	-	-
マンジウノロ	<i>Capreolus manchuricus</i>	-	+	-	-	-	+	+
マンジウアカジカ	<i>Cervus cf. xanthopygus</i>	-	+	-	-	+	+	-
デイボウスキージカ	<i>C. hortolorum</i>	-	-	-	-	-	-	+
マンジウイノジシ	<i>Sus continentalis</i>	-	-	+	-	-	-	-
○ムカジマンジウブタ	<i>Sus sp.</i>	-	-	-	+	+	+	+
○ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i>	-	+	+	+	+	-	-
○ヒツジ	<i>Ovis aries</i>	-	-	-	+	-	+	-
黄羊	<i>Gazella gutturosa</i>	-	+	+	-	-	-	-
○モウコロウマ	<i>Equus przewalskii</i>	-	+	+	-	+	-	-

(○は家畜)

ったのである。

要するに、此の遺跡の人々は、既に家畜を若干もってはいたが、尚生産の一半を狩猟においていた人々であった事がしられるのであって、之等の生物は凡て、現在も此の地方に棲息しているもののみであって、それらから導知せられる気候、及び自然環境等に対する想察は、この地近傍の現状と大差ないものであった事を示現している。

主要参考文献

(満蒙産現生生物に対する参考文献は可成多数に上ったが本調査上直接参考したもののみを掲げ然らざるものは之を省いた)

- 1885—1906 P. M. Heude, Mémorire concernant l'histoire naturelle de l'Empire Chinois (Text) Mammiferes. Chang-Hai.
- 1903 M. Schlosser, Die fossilen Säugethiere Chinas.
- 1910 M. Pavlow, Mammiferes fossiles du misseé de Troitzcossawsk-Kiakhata (Tsavant de la Sous section de Troitzcossawsk-Kiakhata, Section du pays d'Amur du la Sori. Imp. Russe de Geo. Tome, XIII)
- 1912 Miller, Cat. Mamm. W-Europa. Brit. Mus. (Nat. Hist.), London
- 1915 M. Matsumoto, On some fossil Mammals from Tsukinoki, Ugo. (Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., Sendai, Japan. Ser. Z, Vol. III, No. 1)
- 1915 R. Lydekker, Catalogue of Ungulata Mammals Vol. IV, Brit. Mus. (Nat. Hist.), London
- 1923 A. de C. Sowerby, The Naturalist in Manchuria, Vol. II, Tientsin
- 1924 K. Hasebe, Über die Schädel u. Unterkiefer von den Steinzeitlich-Japanischen Hundrassen. (Arbit. Anet. mstit. kaiserlich-Japan. Uni. Sendai, Heft X.)
- 1924 阿部余四男, 「日本石器時代犬科動物私見」(動物学雑誌 36, 433)
- 1925 長谷部言人, 「石器時代家犬に就て, 追加一」(人類学雑誌 40.1)
- 1925 —, 「 ” ” 二」(” 40.3)
- 1927 H. Howard. A review of fossil Bird, *Parapavo californicus* (Miller), from the Pleistocene asphalt beds of Rancho la Brea, Uni. California Pub. Bull. Dep. Geol. Sci, Vol. 17, No. 1
- 1927 吉田新七郎 支那産畜牛の研究
- 1927 T. Mori, A Hand-list of the Manchurian and eastern Mongolian vertebrata
- 1929 森為三, 「朝鮮石器時代に飼養せし犬の品種に就て」(人類学雑誌 44.2)
- 1929 長谷部言人, 「石器時代家犬に就て, 追加三」(人類学雑誌 44.3)
- 1930 Y. Abe, On the Corean and Japanese Wolves, (Jour. Sci, Hiroshima, Uni, Ser. B Div. 1)
- 1930 A. Wetmore and H. T. Martin, A fossil Crane from the Pliocene of Kansas, Condor, Vol, XXXII.
- 1932 H. Howard, Eagles and Eagle-like vultures of the Pleistocene of Rancho la Brea. Contributions to Pal. Carnegie Inst. of Washington, Pub. No. 429
- 1930 C. C. Young, On the Artiodartyla from the Sinanthropus site at Choukoutien. Pal. Sin. Ser. C, Vol. VIII, Fas. 2.
- 1932 三宅宗悦, 「琉球崎樋川貝塚出土家犬に就て」(人類学雑誌 47.10)
- 1934 森 為三, 「朝鮮石器時代の犬科に就て」(小田博士頌壽朝鮮論集)

直 良 信 夫

- 1934 M. N. Bien, On the fossil Pisces, Amphibia and Reptilia from Choukoutien localities 1 and 3 Pal, Sin, Ser, C, Vol. VIII, Fas. 1.
- 1934 森 為三, 熱河の淡水魚類に就て (第一次満蒙学術調査研究団報告第5部第1編)
- 1934 C. W. Pei, On the Carnivora from locality 1 of Choukoutien, Pal, Sin, Ser, C, Vol. VIII, Fas. 1.
- 1935 鷹司信輔外4氏 熱河省産鳥類 (第一次満蒙学術調査研究団報告, 第5部第2区第3編)
- 1936 長谷部言人, 「石器時代の犬に就て」 (日本犬 5.3)
- 1936 齊藤 弘「石器時代犬の体骨とヤマイヌ鑑別私見」 (日本犬 5.4)
- 1936 — 「 ” 追加」 (日本犬 5.5)
- 1936 村田懋磨, 鮮満動物通鑑
- 1936 P. Teilhard de Chardin and C. C. Young, On the mammalian remains from the archaeological site of Anyang, (Pal, Sin, Ser, C, Vol. XI, Fas. 1.)
- 1936 W. C. Pei, On the mammalian remains from locality 3 at Choukoutien. Pal, Sin, Ser, C, Vol. VII, Fas. 5.
- 1937 直良信夫, 「日本史前時代に於ける豚の問題」 (人類学雑誌 52.8)

下記の諸稿は未発表のものであるが、本調査上非常に参考とした。何れ不日発表したいつもりではあるが今その題目のみを載示しておく事とする。

徳永, 直良, 満州帝国哈爾濱郊外顧郷屯発掘の古生物

拙稿, 古生哺乳動物学研究の基礎学として調査せる現生哺乳類の頭骨及び歯牙に就て・第八輯食肉類, 第十輯偶蹄類, 第十一輯奇蹄類

拙稿, 日本哺乳動物史

拙稿, 極東新石器時代の哺乳類

拙稿, 化石猪

拙稿, 日本及近域産化石哺乳類の骨学的研究, イタチ科

拙稿, ” 奇蹄類

拙稿, 旅順管内方家屯羊頭窪貝塚発掘家犬の遺骨

拙稿, 赤峰紅山後出土の鳥獣骨

拙稿, ハイラル南方ドロット発掘の鳥獣骨

一九三八, 六, 六 早稲田大学恩賜館内獣類化石研究室

直 良 信 夫

(原文執筆時より既に48年余が経過しており、漢字仮名使い等、現在とは異なり、必要最少限を現在の慣用に従い改めた。註1の「額拉蘇」は原文では「俄羅斯」であるが、各報文間の統一を図るため変更した。(大貫))

付 額拉蘇 C(オロス) 遺跡の直良原稿について

平 井 尚 志

当紀要の本号に昨秋長逝された直良信夫博士の遺稿「チチハル近傍俄羅斯(額拉蘇)発掘の自然

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

遺物」が収載されることとなった。博士がこの原稿を書かれたのは昭和13年であった。50年後に近い今日幸いここに印刷公表されるわけであるが些か本稿に関係をもつたものとしてその顛末をここに記しておきたい。

大貫静夫氏(旧姓小川)もその論考のなかで触れるであろうが昭和8年7月の初め駒井和愛、水野清一両先生は旧満洲牡丹江省寧安県東京城の第1回発掘調査を終了してのち北満鉄道(中東鉄路、東支鉄道)で哈爾濱(ハルビン)を経て当時満洲国と称した龍江省龍江県の齊齊哈爾(チチハル)に赴かれた。まづその近郊の葫蘆頭、昂昂溪、俄羅斯(額拉蘇、オロス)、砂崗子などで小発掘と考古学調査をこころみ、更に西々北上して海拉爾(ハイラル)に到り西砂丘、ウヂェルブルド、ホルフトイ・マンガンでも調査を行い石器などの遺物を採集された。翌9年も第2回目東京城発掘調査をおえてから三上次男先生も加わって6月末ハイラルに入り、いわゆる呼倫貝爾(ホロンバイル)地方を再度調査された。帰路には前年に引続いてオロスの貝塚などの再調査を予定しておられたが合憎くと嫩江が氾濫して貝塚などの遺跡も水浸していたので調査を断念して引き上げられた。

これより先1928年(昭和3年)にハルビン博物館のE. I. ティトフ、V. J. トルマチェフ両氏がハイラルに於いて、またA. S. ルカシキン氏は昂昂溪で、その2年後には北京から梁思永氏が来たり同じく昂昂溪で遺跡をそれぞれ発掘した。これらの調査をうけた遺跡はいづれも細石器文化の包含層であり、ここでは細石器に土器が伴うこと、昂昂溪では墓址も発掘したことが報告された。内蒙古高原で細石器の散布する砂丘遺跡を歩かれ遺物を採集された経験をもつ両先生はこの包含層や土器の伴出に強い関心をいだかれた。これが一つの動機となって東京城からの帰途(後出本の原田博士序文によれば“調査の余勢をかって”)となっている)治安もまだ十分とは言い切れないこの地方に入り踏査を進めることとなったようである。昭和14年に座右宝から上梓された三先生共著の「北満風土雑記」にはこのオロス紀行も何頁かにわたって記述がある。期待を持った墓址は見付けられなかったが思い掛けなくも貝塚(我国の貝塚の概念とはやや異なる)を発掘することが出来た。蓋しこの貝塚はこの地方で初めて発見されたもので将来に亘ってその意義は大きい旨がしるされている。

しかしこのオロス貝塚をふくめこの地方で行われたこの2回に亘る調査の正式な報告書は残念ながら出版に至らなかった。ただ後年故駒井先生の筐底から「駒井和愛・水野清一著 齊々哈爾、海拉爾遺跡」と書いた日誌風の原稿が見出され、昭和52年に雄山閣出版から刊行された駒井和愛著「中国都城・渤海研究」の雑録篇に収められたものがある。更に1、2度この方面の調査を重ねてから本報告書を纏める考えもおありだったように思えるし、そのようなことを伺った記憶もある。しかしその機が残念ながらなかったのでオロス出土遺物も先生の論文中の挿図に用いられた2、3の骨器、昭和34年に東京大学刊行の「考古図編」第17輯の図版10、11に載せられた22点の石器、有孔土製円盤(図編では土製紡錘車)、骨器4点、蛇腹様隆線文土器片2点以外には学界でも殆んど知る処がなかったといつてよい。この第17輯が出版されたころ、日本の洞窟遺跡から隆線文土器の発見があり、これが日本最古の土器の1つとして登場して来た時である。この土器がオロス出土の

直 良 信 夫

この隆線文土器との類似、細石器のことなどから両者間に関係があるのではないかと指摘が一部考古学研究者の間で論議される処もあった。先生はオロス出土土器については発掘した状況からして日本縄文文化草創期に較べられるような古いものとは考えられないと言っておられた。

水野先生は1年ばかり病床にあられたのち昭和46年5月に逝去され、駒井先生もその半年後の11月に忽然と急逝してしまわれた。駒井先生亡くなられたあと冨美子夫人が嘗って先生の講筵に列した人々の手伝いをうけながら先生の遺稿や遺品を整理しておられた。昭和48年の冬であったかお訪ねしたおりに「主人が遺した書類のなかから直良先生がお書きになったこんな原稿が出て来た。先生にお返ししなくて良いのだろうか、平井さんは直良先生を御存知と思う故云々」の御相談をうけた。拜見すると400字詰で約60枚の原稿である。当時既に40年近く経っていたので用紙の周りは黄色くなっていたが内容は貴重なオロス出土の自然遺物の調査報文ではないか。

間もなく、直良先生は東京を引揚げられ出雲に隠棲してしまわれた。私は当時大阪に在勤中であり島根へ出張する機会がないわけではなかったので何れ先生にお会いしどうしたらよいか伺いましょうと御返事をした。暫余して夫人は入院され昭和49年の5月先生を追って亡くなられた。考古学科卒の藤江稔氏は住所が先生のお宅に近いことや以前からの経緯もあって先生の遺品や蔵書の整理を全面的にしてあげなければならない羽目となり、休日には必ず出掛けてこのことや遺稿集出版のことに努力された。こんな過程のなかでこの直良原稿が私のもとに送られて来た。先づは手紙でこの件を著者の直良先生にお報せし御指示をまった。先生からの御返書では、このこと忘れていた。貴翰により昔駒井、水野氏からオロス出土の自然遺物の鑑定とその報告を依頼されて原稿を書いたこと今思い出した。古い原稿ではあるが今日となっては北満へは再び行けないし、学問的にも貴重な資料の報告である故何とか公表出来るようお願いしたい旨の内容であった。

その後私ごとながら身の多忙から名大のW助教授にこの話をしたこと位で申し訳なかったが気にしながらもその儘になっていた。その後さて何かののせて貰うとなると自然遺物のみの報告であること、学名羅列の頁が多いので印刷費の負担も可成りになることなどの問題が出てくる。立教大学の博物館学研究室には駒井先生がこの北満洲を踏査された時にチチハル、ハイラルで採集し当時史学科の教材資料として寄贈された細石器、玉など7、8点が所蔵されている。このことは前々から知っていたのでこの実測図をトレースし、最近中国で発表されたこの方面の石器時代遺跡報告などを参照した文を書きこの直良報文に附して関係誌にのせて貰うことをN教授に頼もうかなどと考えた。それには先づ東京大学の考古学研究室にあるオロス出土の石器、土器などを見せて貰うべく研究室へお願いした。渉にあたっていただいた今村啓爾氏より大貫静夫氏がこの資料を整理し最近論文を執筆中のはづ故同氏にも会われることをすすめられた。同氏との会話のなかでオロスで発掘された自然遺物の一部も今なお研究室にのこっておりこの報文を金子浩昌氏に依頼してある旨も伺った。私も当然直良論文の存在をお伝えした。

その後間もない昨年11月直良先生も黄泉の道をたどられその告別式が神奈川県秦野の先生の菩提寺で行われた。私も御焼香に参じたがその帰路の電車のなかで偶然金子氏と一緒にあった。温厚で

額拉蘇C（オロス）遺跡出土の動物遺存体と骨角器

あられた先生のことを偲びながらオロスの直良論文のことなどを金子氏にもお話した。氏も大貫氏同様にこの未発表論文のことは初耳のことでもあり少なからず驚かれ、またその貴重性については同感するところ大であった。

今回、東京大学考古学研究室にのこるオロス遺跡出土の石器、土器など人工遺物についての大貫論文、また自然遺物に関する金子報文がこの紀要にのる訳であるが、自然遺物の報告については50年前に書かれたとは云えいわば原点とも云うべき本稿がこの紀要に収められることこそ関係3先生の意にもかなうもの、また同一紀要に纏まって発表されることが後学に最も資するところ大との意見が一致し本紀要に出来れば直良原稿をのせて欲しい旨をお願いした。上野、藤本両教授ならびに編集責任各位の御理解によって本号に直良論文が収められることとなったのである。。この原稿を永らくお預かりした私からも厚く御礼を申し上げる。因みに直良先生は駒井、水野先生がこのオロス遺跡などを踏査されたその年即ち昭和8年の6月に満蒙学術調査研究団の一員としてハルビン市西南郊温泉河畔顧郷屯（Ku-Shan-ton'g, Tuxiangtun）の低湿地遺跡を徳永重康博士と発掘されている（第一次調査）。また前記ルカシキン氏、梁思永氏、昭和15年夏の奥田直栄氏、1945年以降の中国研究機関や学者による（黒龍江省博物館、齊齊哈爾市文物管理站、李龍、譚英傑氏ら）この方面での調査や論考については大貫論文が触れられるところがあるろう。ここに直良原稿印行にいたった経緯もしるして現黒龍江省昂昂溪、オロス遺跡の研究史の一記録としておく。

附

直良先生の年譜、著作目録などは高橋 徹「明石原人の発見」（教養文庫）、杉山博久氏らによる「直良信夫先生年譜および著作論文目録」1972、また「小田原考古学研究会会報」第9号が直良信夫先生喜寿記念号（1980）、「古代」第82号（1986）は江坂、桜井、杉山（荘）氏ら十数名による追悼文を収載している。